

# 中学校社会科における授業力の育成

蒲生 晃

## 1 はじめに

～本授業がめざすもの～

教科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（社会）を進めるにあたり、この授業を受講する学生の状況を知り、意義ある対応を考えてみた。

学習指導要領は、これまで約10年の間隔において改正されてきた。本授業を受講している学生は、平成10年に教育課程審議会の改善の方針に基づいて改正され、平成14年4月から実施になった学習指導要領のもとで、中学生、高校生として学校教育を受けてきた。完全学校週五日制の下で、「ゆとり」の中で「特色ある教育」を受け、個性を生かし、自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」を育ててきた。一方で、各種の調査から、全体的に我が国の児童生徒の学力に関する多くの課題が指摘され始めた。

そこで、21世紀を生き抜く児童生徒の教育の充実と、教員の資質・能力の向上などを図るため、新学習指導要領が平成20年に告示され、今年度から本格実施となった。この間に教育基本法等が改正されており、それらを踏まえての改善である。

したがって、教師をめざす学生にとって新学習指導要領及び中学校社会科の改善の基本方針と新たな社会科の目標・内容等を理解することが重要となる。学生自身が中学生の社会科で何を、どのように学んできたのかを思い起こし、実際に教師として生徒の前に立つことを意識し

て、工夫・改善を図ることにより、よりよい授業づくりに努めていくことが大切である。これが本授業でめざすものといえる。

教育は人間であるといわれる。改善された教育を実効あるものにするには、学ぶ側の児童生徒もいるが、教え導く側の教師の力にかかっているという過言ではない。教師の資質能力＝あるべき教師像としては、教職に対する使命感や責任感、教科に関する専門的な学識などを基盤とした学習指導・授業力からなる教育の専門家としての力量、さらに、教師が児童生徒の人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、人間関係力、コミュニケーション能力などの人格的な資質が求められる。また、教師の資質能力の向上のためには、職場全員と個々の教師の能力を評価し改善を図っていくことが重要である。教職全生涯をかけて蓄積されていくものであるが、少なくとも学生時の早い時点から身に付けていくことが大切である。

したがって、専門職である教師をめざす学生の授業力の育成こそが本授業での指導案づくりと模擬授業の実践、授業評価活動の実施を通してめざすものである。

## 2 授業内容

新学習指導要領の改訂の基本的なねらい、中学校社会科改訂の趣旨と要点、社会科の教科目標と教科構造、各分野の目標及び内容、指導計画の作成と内容の取扱いなど基本的な知識・理

解とともに、教育課程の意義及び編成の方法、学習指導の在り方、学習評価の方法などの教育技術の習得を図る。修得した知識・概念や技術・技能を活用して、学習指導案を作成し、模擬授業を実習し、その後の授業評価活動を通して、よりよい授業の創造と教職への意欲と教員としての授業力の向上を図る。

### 3 授業実践

～教科教育法社会Ⅰ・Ⅱを中心に～

#### (1) 授業計画

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| ① | ガイダンス履修上の留意事項                 |
| ② | 我が国の社会科教育の変遷                  |
| ③ | 中学校社会科の目標と教科構造                |
| ④ | 各分野の目標及び内容(各1時間)              |
| ⑤ | 学習指導法(3時間)<br>指導過程、指導形態、評価法など |
| ⑥ | 学習指導案の作成(2時間)<br>先行事例、教材の研究   |
| ⑦ | 模擬授業と評価活動(3時間)                |
| ⑧ | まとめ                           |

教育法Ⅱでは、復習として⑤⑥を各1時間⑦を中心に10時間をとる。

#### (2) 授業運営

- ・社会科における基本的な知識・概念や技能については、レジュメを用意し、講義形式を基本とする。また、適宜、指示された課題を発表する場(レポート提出)や関連した小テストを実施して、学生自身が自分なりの課題に気づき、指導と評価の工夫・改善に資する。
- ・修得した知識、概念や指導法を活用して学習指導案を作成し、それに基づいた模擬授業及び評価活動を通して、授業力の向上を図る。
- ・学生が教師と生徒の立場に立って相互に評価し協議する。協議結果を生かし以後の評価力を向上させるため、授業者は改善した指導

案を事後に提出する。また、自分で気付かなかった評価の観点を評価票に記入する。

#### (3) 授業内容と展開例

- |   |            |
|---|------------|
| ① | ガイダンス      |
| ア | 履修上の留意点    |
| イ | 学生の中学校社会科観 |

#### アに関して

予告した三分野の小テストを実施した。地理では、常に略地図を手書きさせ、県名と県庁所在地名を適切な位置に記入させた。繰り返すと次第により描図ができた。世界の略地図にも挑戦が期待される。歴史では、時代の流れと人物及び事項の関係を問うようにした。細かい事象の関連性の理解に困難点が見られた。公民では、領域ごとに出題したが、比較的理解力があつた。

#### イについて

受講生で、社会科が得意科目であつた者は少ない。嫌いな分野は、地・歴でほぼ半々であつた。理由を問うと、地理は地形の用語のイメージがわからない、何のために学ぶのか分からなかつたと答え、歴史は事象の詰め込み授業でよく覚えていない、歴史の大きな流れを読むのが苦手だつたとの答え。このような意識を生じさせない授業づくりをさせたい。学習形態ではザブトン型とパイ型が相半ばしていた。

- |   |                  |
|---|------------------|
| ② | 我が国の社会科教育の変遷     |
| ア | 戦前の地理・歴史・公民科教育   |
| イ | 戦後教育改革と社会科の成立    |
| ウ | 学習指導要領の改訂と社会科の内容 |

#### ア、イに関して

歴史的事象の知識・理解が不十分であつたが、教科書や歴史年表を用いて確認していくことで理解が深まる。

#### ウについて

受講生が中学生であつた頃の学習指導要領を知るにより、経験的にはわだかまりを感じ

つつも、新学習指導要領改訂の経緯や要旨の理解が深まった。授業では、文科省学習指導要領解説社会科編を使用書としており、各自に持たせているので、予習・復習に活用している。社会科改訂の基本的な方針を分野別にマトリックス化してまとめる作業をさせた。理解しやすくなったという。また、この授業後、パイ型学習の問題点とその解決に向けた工夫を課題として提出させた。

- ③ 中学校社会科の目標と教科構造
- ア 目標の構成
  - イ 用語の意味
  - ウ 指導計画の作成と内容の取扱い
  - エ 資料活用と作業的、体験的な学習
  - オ 政治及び宗教に関する事項

#### イについて

受講生にとって、多面的・多角的な考察、社会認識、公民的資質の基礎などの用語は文字としては使えるが、それらの意味するところの理解が不十分であった。説明不足が原因と思う。

#### ウについて

授業時数の増加は、社会科の目標が十分に達成できるよう、内容の拡大に伴う重要な配慮事項であることを理解させた。また、道徳の適切な指導ができることは、社会科教師にとって重要な力量であることを考えさせた。具体的には指導案づくりの段階で再確認することとした。

#### オについて

党派的政治教育や国公立学校での特定の宗教教育・その他宗教的活動が実社会の中ではどのようなものか、新聞などで扱われる事例を通して考えさせると理解が深まる。

- ④ 地理的分野の目標と内容
- |          |          |
|----------|----------|
| ア 改正の要点  | イ 目標の(1) |
| ウ 目標の(2) | エ 目標の(3) |
| オ 内容     | カ 内容の取扱い |

#### アに関連して

6項目の改正要点を順次講義形式で説明するより、新旧の教科書を比較し、どこが、どのように変わっているか見取らせると理解が早い。旧教科書は、学生たちが中学生時に使用していたものとはほぼ同じだが、新教科書では、世界と日本の地誌的な学習になっている。学生の驚きと戸惑いが感じられた。平成元年改訂の学習指導要領以前の内容を知らない彼らだからこそ、受け入れも早く地域的特色を動的に国土認識させる学習指導ができるであろう。

なお、地理的な見方や考え方が解説編の中に整理した記述がある。目標の(2)、(3)とも深く関連しており、地理的分野の全般を通じて培うものであるので、しっかり確認した。また、地域の概念の理解も重要であり、意味するところを読み取らせることに留意した。

地図の読図や作図は、地理の学習への関心を高め、思考力、表現力等の能力を育てる言語活動の充実に資する。教師自らフリーハンドで描図することは、興味、関心を高めるものと考え、学生に常に求めている。

以下、④歴史的、公民的分野の目標と内容⑤学習指導法、⑥学習指導案の作成の授業計画と授業実践は省略する。

- ⑦ 模擬授業と評価活動
- ア 分野別模擬授業の実施
  - イ 実施後の自己評価と相互評価
    - 教科教育法 I での取組みを報告する。

#### アについて

教科教育法 I での模擬授業は、各分野一単元一単位時間を設定した。今期は、分野を学生に選択させ、複数の希望があれば同じグループにし、協議の上で単元を設定し、共同で指導案づくりをさせ、誰が授業者になるかを決めさせた。

- ・地理的分野 2年 世界から見た日本の人口
- ・歴史的分野 3年 第二次世界大戦と日本

・公民的分野 3年 私たちのくらしと経済  
 受講者にとって初めての授業とは思えない模擬授業が展開された。授業後に聞くと、他の講義で既に実習していた、塾の講師や家庭教師などの経験者が実施したという。なお、教育法Ⅱでは、受講者一人ひとりが複数の分野と単元を実習する。

#### イについて

計画→実施→評価→改善 (PDSA) のサイクルは、企業だけではなく学校評価や授業評価で取り入れているところが増えている。評価の段階で終了するのではなく、改善まで取り寄せたい。改善策は、必要に応じて、次回以後の模擬授業に生かされなければならない。

このサイクルを学生の時期に経験し、教壇に実際に立った後にも継続して実践していくことが授業力を向上させ、総合的な人間力といえる「あるべき教師像」に近付ける方途であると思う。評価と改善のために作成するのが模擬授業評価表である。形式、名称は種々あるが手早く簡単に記入できるものを用意したい。評価の観点としては、指導過程に沿って、導入の工夫、説明・発問の仕方、教材資料の使い方、板書の仕方、まとめの工夫などを設け、4段階の評定尺度で記入させる。反省や感想、気付いた点などを文章表記できる欄は是非設けたい。社会科として、指導要録の4つの観点別評価は取り入れている。評価の実情を見ると、授業者とそれ以外の学生との評価結果には、大きな差が見られた。授業者の自己評価が低く、コメントも少ない。真実か、謙虚さの表出か、2段階の格差が生じている観点もあった。生きた評価にするために学生同士の評価力を向上させる必要を感じている。継続して指導にあたりたい。

授業者、または共同制作者として大切にしたい点を確認した。

- ・教師はあくまで生徒の学習を補助する立場であり、分かりやすい説明を心掛けた。
- ・導入が面白くなければ生徒は教科が嫌いになる。興味がもてる導入に心掛けた。

- ・生徒が発言した内容は、受け入れ、褒めることが大事。
- ・生徒が話を聞くだけでなく、考えながら授業に参加できるように。
- ・用意した資料が生徒に読み取られ、活用され、理解が深められたか。
- ・グループ学習で生徒の思考力、表現力とともに、協調性などが身に付くようにしたい。
- ・机間指導により生徒の様子を見取りたい。

#### 4 おわりに

旧学習指導要領の下で学習してきた学生が新学習指導要領に示された内容とその取扱いで学習を進めることができるだろうかという危惧の下、本授業を行ってきた。

本授業最終時の振り返りアンケートを見ると、なりたい教師像がガイダンス時に比べ、具体性を帯びて書いている。教育法の講義を聞き、指導案作成や模擬授業を実習したことによって、経験や知識の不足をプラス思考で自覚しており、いろいろな機会を利用して、幅広い知識・教養を身に付け、指導技術を磨き、自分らしい授業づくりをしたいと真剣に考えている。同じ授業を受けている仲間として、話し合い聞き合っていくなどして、人間関係力やコミュニケーション能力を強めたいとも思っている。人間力、授業力が伸びていると実感している。

生きる力を育てるために質の高い教育活動が求められている現在、教員の資質能力の向上は不可欠である。大学では、あるべき教師の最小限必要な資質能力の育成をめざしている。教育法Ⅰ～Ⅳでは、模擬授業や評価活動を一層充実させ、専門性、人間性、指導性を育てたい。